

官位・昇進に関する叙述からみた『源氏物語』の特色

— 物語と史書 —

佐古愛己

はじめに

第一章 源氏物語作中人物の官位に関する研究史

第二章 描かれない昇進慣例―権中納言の記述を巡って―

(一) 平安前・中期の昇進制度

(二) 摂関子弟の昇進慣例

第三章 光源氏の昇進

(一) 参議兼大将

(二) 参議から権大納言、大臣への昇進―権中納言の超越―

(三) 准太上天皇

第四章 夕霧と薫の昇進

(一) 夕霧の元服と昇進過程

(二) 薫の元服と昇進過程

第五章 昇進秩序に関する紫式部の主張

おわりに―物語と史書―

本稿は平安時代における現実の昇進制度と、『源氏物語』に叙述される官位や昇進秩序とを比較検討し、物語の特色を考察したものである。主に論じたのは次の三点。①律令制下の昇進制度から平安時代的なものへ変化したのは九世紀半ばから十世紀初頭である。これ以前の例を用いることで、読者に源氏の特異性を印象付ける効果を与えた可能性がある。②兼家以降に出現した摂関子弟が辿る特別な昇進慣例があえて描かれないうちに、従来の慣例を破り急激な官位上昇を果たす当時の風潮に対する作者の批判が読み取れる。③六国史では描き出せない世相批判を、中国史書等の叙述方法に学び、仮名での叙述によって試みたのが『源氏物語』ではないかと考える。

はじめに

『源氏物語』は一一世紀初頭に成立した物語文学であると同時に、平安時代の貴族社会の習俗、思想や文化を窺い知るための貴重な歴史資料でもある。

蜚巻の有名な物語論では、「神代より世にあることを記しおきけるなり。日本紀などはただかたそぼぞかし。これらにこそ道々しくはしきことはあらめ」、さらに「その人の上とて、ありのままに言ひ出づることこそなれ、よきもあしきも、世に経る人のありさまの、見るにも飽かず聞くにもあまることを、後の世にも言ひ伝へさせまほしきふしぶしを、心に籠めがたくて言ひおきはじめたるなり。よきさまに言ふとは、よきことのかぎり選り出でて、人に従はむとは、またあしきさまのめづらしきことをとり集めたる、みなかたがたにつけたるこの世の外のことならずかし。他の朝廷のさへ、作りやうかはる、同じ大和の国のことなれば、昔今の変るべし、深きこと浅きことのけぢめこそあらめ、ひたぶるにそらごとと言ひはてむも、事の違いひてなむありける。」と、源氏に語らせ、虚構の中に人間の真実を描くものとして物語を高く評価する紫式部の考えが述べられている。

物語は、これと対置される日本紀、すなわち朝廷によつ

て編纂された正史たる六国史よりも、「道々しい」政道に役立つものだという主張からは、物語の方が人間や人間世界を説得的に語ることができるといふ紫式部の考えが窺えよう。そして、真名で著された従来の日本の官撰史書を超える史書としての側面が、物語にあることを暗に主張しているようにみえる。

また「他の朝廷のさへ」として異国Ⅱ中国の物語をも視野に入れた源氏の語りは、作者自身が中国の物語や史書を意識していたことを如実に表わしてもいよう。

人間の複雑な心情や世の中の真実の細やかな描写が、仮名によつてはじめて成し得るといふ点のみならず、六国史が書かなかつた、そして書けなかつた歴史を叙述するという側面から、『源氏物語』の特色を考えてみたい。

本稿では歴史学の立場から、官位や昇進に関わる記述を手がかりにして、『源氏物語』の特色を考察したいと思う。

第一章 源氏物語作中人物の官位に関する研究史

フィクションである物語を歴史資料として使用する際には、細心の注意が必要であるが、歴史学的な観点から、平安時代の文学作品を活用した研究の必要性も強く説かれている。山中裕氏や黒板伸夫氏の研究は、歴史学研究の立場から『源氏物語』を扱った代表的なものであり、近年では

服藤早苗⁽³⁾、瀧浪貞子⁽⁴⁾、元木康雄⁽⁵⁾、三橋正等⁽⁶⁾の各氏によって、ジェンダー、王権論、宗教文化などの様々な視角から研究が進められている。

本稿では、以上のような先行研究に導かれながら、筆者の関心に基づき、官位や昇進に関する記述に着目して、『源氏物語』に描かれた内容と現実の平安時代のそれとの比較検討を行い、『源氏物語』の記述法の特徴や紫式部の主張、意図を探ってみたい。

作中人物の官位昇進に関しては、古くは四辻善成の『河海抄』にまで遡る膨大な研究史があり、近代以降も源氏研究における中心的な課題の一つとされ、国文学、歴史学双方から多くの検討がなされてきた。

『源氏物語』は賜姓源氏たる光源氏を主人公としていることをはじめ、桐壺・朱雀・冷泉・今上帝は歴史上の宇多・醍醐・朱雀・村上天皇をモデルにしていると考えられる点などから、寛平・延喜・天暦年間に物語の時代設定がなされ、該期の賜姓源氏、文人貴族なども作中人物に反映していることが、諸研究によって指摘されている⁽⁷⁾。

一方、紫式部と同時代に准拠している部分も多いことが明らかにされている。光源氏の昇進状況を検討された山中氏は、源氏のモデルが源高明や藤原道長だという諸説を踏まえ、彼らが左大臣であったのに対して、源氏が大納言か

ら内大臣、太政大臣となり、左大臣に就任しない点に着目された。そして頭中将も、源氏と同様の昇進過程をめぐんでいることから、内大臣が重視されるという物語の特徴を分析している。史実との比較の結果、右大臣―左大臣を経て太政大臣に至った例は、藤原良房から頼通の間では、忠平・実頼・頼忠・道長の四人であり、むしろ内大臣から太政大臣へ昇進する方が多く、紫式部が生きていた平安中期の風潮をよく表したものと評価する。そして、「紫式部は、意識的に光源氏に左大臣を物語の世界の中で避けたのだろうか。今井源衛氏は、左大臣の呼称がそのまま左大臣道長を指すものであったことを憚った作者の所為だと推測する」との今井氏の言説を、山中氏は提示している⁽⁸⁾。

また、黒板氏は、『源氏物語』に登場する男性の官位について詳細に論じられ、紀伊守や明石入道のような受領や彼らが在地化する様子、さらには源氏の二条院に入りする家司・家人の世界にまで分析を及ぼし、古代から中世へと激動しつつあった時代の様相が描き出されているとしつつも、『源氏物語』の中に描かれる官位は、必ずしも紫式部の生きた時代の官位制そのままではなく、平安前期のあり方も投影されているし、虚構もある⁽¹⁰⁾と評価した。さらに、「これらは、虚構性を強調したり、時代設定を遡らせる作者の意図なのか、あるいはまだ解明すべき何かがあるのか、

それらはそれで究めるべき興味あるべき点である」と結んでいる。⁽¹⁾

以上を要するに、これまでの歴史学的視点からの研究によって、『源氏物語』に描かれる官位・昇進秩序は、紫式部と同時代もしくは平安前期のものに準拠していることが多く、全くの虚構の場合もあることが明らかにされており、その背景として、道長を憚った作者の所為と考えるべきことや、まだ未解明の何かを考える必要があるとの課題が残されているといえよう。

前述の通り、『源氏物語』の官位に関する研究は、個別研究も含めると非常に多く、様々に論じられてきた問題であるため、屋上屋を架すきらいがあるが、従来の研究において十分に論じられていない点もあると思われるため、以下に取り上げてみたい。

第二章 描かれない昇進慣例

―権中納言の記述を巡って―

『源氏物語』に描かれる事項や人物が、何時頃の実態に合うものなのか、どのような、そして誰の例に擬えているのか、つまり史実の何をよりどころにしているのかを探る「準拠」論は、源氏研究の主要な方法論だと了解する。しかし、それとは逆に、紫式部が生きていた時代に当然知ら

れていたと思われる事象や慣習、もしくは特記すべきようなそれらが記されていないことがあるならば、その点に着目し、作者の意図を探るという分析視角も必要であろう。

すなわち、歴史資料である古記録上でよく目にする事項や特記すべき事柄が、物語で触れられないのが意図的であるならば、そこには作者の何らかの意思を読み取る必要があると考えるためである。

かかる観点から物語を通覧すると、不思議な記述に気づく。それは、紫式部が生きていた時代に出現した特異な昇進慣例が記されていない事実である。すなわち、藤原道長が従三位左京大夫から権中納言へ昇進したように、参議を超えて権中納言へ進む昇進慣例である。

具体的な検討に入る前に、平安時代の貴族・官人たちの実際の昇進制度について確認しておきたい。

(一) 平安前・中期の昇進制度

平安時代の貴族の昇進制度において、九世紀は大きな変化を迎えた時期だといえる。

それ以前、すなわち日本古代の律令制下における官人は、考課・選制という方法によって、昇進が行われていた。具象的には、官制上の出勤方法の区分（内長上・内分番・外長上・外散位）に基づき、勤務評定を受けるのに必要な年

間の勤務日数（上日）が決められており、その日数を満たした上で、「善」という徳目項目と、「最」という職務達成基準とによって、毎年本司の長官に評定され（「考仕」）、これを一定年数積み重ねる（「成選」）と、その総合成績によって位階が進められるしくみ（考課成選制）が定められていたのである。

例えば、常勤の中央官人である内長上の場合、年間二四〇日以上の上日が勤務評定を受ける前提となり、これをクリアした官人は本司長官から、「善」と「最」による「上上」から「下下」の九等級評価を毎年受ける。そして、「中中」以上の評価を六年間獲得すると、一階昇進できるという規定であった。このような考課成選制は、基本的には統一的な基準と機械的な評価算出に基づく勤務評定であり、徳行才用主義の導入と一律の基準による機械的な昇進制度の構築を目指した官僚制に適合的な昇進制度だと評価できよう。如上の内容は、考課令と選叙令に規定されているところであるが、これらは中国唐令の考課令・選舉令を継受したものである¹³⁾。

ただしここで留意しておきたいのは、中国隋代において、門閥家の特権を認めた九品官人法が廃され、個人の才能に従って官吏を登用する目的で創設された官吏登用の資格試験、すなわち科挙制が成立し、以後清朝まで継承されたが、

日本は科挙を導入することはなかったという事実である。さらに唐の制度を継受した蔭位制においても、唐と比較すると、日本のそれは五位以上に対する優遇の度合いが著しく高く設定されており、貴族階級を同一階級から再生産するうえで重要な役割を果たしたという点である¹⁴⁾。

そしてそもそも五位以上の勅授は、天皇の意向が授位に大きく反映するため、考課・成選の結果が直接かつ単純に昇進に反映されることはなかった。ただし、その結果が全く無視されていたとは考え難いことが、吉川真司氏によって指摘されている¹⁵⁾。

以上を総合的に理解するならば、日本の律令制下では、官人の出身と昇進の制度において、徳行才用主義の導入と一律の基準による機械的な昇進制度の構築を目指しつつ、唐との比較において、蔭位制成立当初より五位以上に対する優遇の度合いが極めて高く設定され、さらに五位以上（勅授）の昇進では、考課成選が早期に直接的には機能しなくなり、天皇の意向が強く反映するという特色がみられるとまとめられよう。

このように勅授においては、昇進基準が特に設定されており、天皇の意向如何という無原則・恣意的傾向が強い特徴があったといえる。こうしたあり方に変化が現れるのが、九世紀半ば頃から一〇世紀初めにかけての年勞制の成

立である。⁽¹⁶⁾

年勞制とは官職の年勞（在職年數）に応じて昇進する制度である。そして昇級に必要とされる年限が官職ごとに異なつて設定された。つまり官職によつて、昇進に有利・不利が生じるため、最も昇進に有利な官職を経て公卿に昇る、「侍從→兵衛佐→近衛少將→同中將→参議」という昇進コースが姿を現すことになった。⁽¹⁷⁾

このような昇進制度の変化がみられる背景には、主として桓武から嵯峨朝にかけて実施された律令官司の再編や、承和の変等による藤原北家勢力の更なる伸張、加えて嵯峨朝から宇多朝にかけて成立・整備された昇殿制との関係があつたと考えられる。⁽¹⁸⁾

昇殿制との関係でいえば、「簡一」や年給（年爵）という昇進事由が成立する背景にも言及しておきたい。昇殿制とは、周知の通り、宣旨によつて天皇の居住空間である内裏清涼殿の殿上の間への伺候が許可される制度であるが、代替わりごとに更新を要する点に明示される如く、位階制とは異なり、天皇との「人格的・身分的從属關係」に依拠する身分標識であつた。⁽¹⁹⁾昇殿が許された四位・五位の貴族を殿上人という。そして殿上人として上日が最も多い人物を賞して昇給させる「簡一」という昇進事由も一〇世紀末頃より見られるようになる。また従来、封祿制度として位

置づけられていた年給は、給主（院宮Ⅱ上皇・女院・三宮など）が家政機關の職員や近親者に官位を給わることと本質とする制度だと、近年の研究によつて明らかにされているように、給主との「人格的・身分的從属關係」に依拠する昇進事由が様々に成立し、定着していった。⁽²¹⁾

如上、官職によつて昇進の有利不利に格差が設けられ、また天皇や院宮との親疎が昇進に大きく影響する傾向が十世紀には一層強くなつていった。

このようにして前述の昇進コースを辿りつつ、殿上人を経て公卿に昇進する公達と、昇殿が許可されずに四位・五位止まりの諸大夫、そして基本的には六位止まりの下地の侍という三つの階層が成立したのであつた。上述の昇進制度と三つの階層は、若干の変化を伴いつつも、中世貴族社会へ引き継がれていった。⁽²²⁾

つまり九・一〇世紀に確立した昇進制度（便宜的に以後、「平安時代的な昇進制度」と記す）は、律令制下とは大きく異なる平安貴族社会の形成と深くかわりあつて成立したものであり、中世貴族社会の身分秩序を形成することになったのである。そして、紫式部が活躍した一〇世紀末から一一世紀初頭は、その昇進制度が定着し、平安貴族社会における身分の階層分化が進む一つの画期だったといえるのである。

(二) 摂関子弟の昇進慣例

九世紀以降、承和の変をはじめとする様々な政変と入内政策とによって、政治的ライバルを失脚させつつ、天皇のミウチという立場から政治の実権を掌握する政治形態―摂関政治―が展開していった。良房以降の摂関子弟は上述のような有利な昇進コースと、天皇や院宮との密接な人間関係を利用して、年爵や勳賞などさまざまな恩典を得ること、破格の昇進を果たすようになった。

そのなかでも、『源氏物語』作中人物の昇進の特色を検討する上で重要と考える、①元服叙爵と②参議を経ずに権中納言へ昇進する事例について、取り上げておきたい。

まず①元服叙爵とは、有功公卿の子孫が元服と同時に叙爵することであり、その濫觴は仁和二年（八八六）正月二日、一六歳の藤原時平が内裏仁寿殿で元服し、正五位下に叙された事例である。その際、光孝天皇より賜った「神筆」の位記に、「咨爾時平、名父之子、功臣之嫡。及此良辰、加_レ汝元服。鳳毛酷似。爵命宜_レ殊_{②③}」とみえるように、「名父之子、功臣之嫡」であることが叙位の理由だとわかる。

これは「臣事_レ君、尽_レ忠積_レ功。然後得_レ爵位_{②④}」という令制下の授位原則から大きく懸隔しており、出仕経験のない人物が父祖の功績のみによって、元服と同時に五位とい

う高位に叙されるようになったことを意味しているのである。元服叙爵の成立は、位階制の歴史において大きな画期と位置づけられよう。

そして、摂関・太政大臣など「有功公卿子孫」の嫡妻子は正五位下に、庶子は従五位上に叙されるという慣例が、円融朝に定着した。また、延喜一三年（九一三）正月七日、贈太政大臣正一位藤原時平の二男顕忠が、一六歳で「東宮御給」により叙爵したように、元服直後の恒例もしくは臨時叙位において、院宮の御給を用いて叙爵する慣例も、一〇世紀半ばの村上朝以降、参議以上の子息にまで広まったのである_{②⑤}。

このようにして元服と同時に叙爵した公達子弟は、最も有利な昇進コース「侍従→近衛少将→近衛中将→（藏人頭→）参議」を経て、若年にして公卿に至るようになった。この昇進コースは中世以降も基本的に継承されるが、なかでも摂関・関白の子弟などごく限られた者は、三位中将等から参議を超越して、いきなり権中納言に直任されるケースがみられるようになる_{②⑥}。

藤原兼家を初例とするこのような昇進は、（表一）に示した通り、その息道隆・道長、道長の子息である頼通・教通・頼宗・能信、さらに頼通の子息師房・通房・師実、教通の子息信家で見られ、以後摂関子弟の慣例となり中世以

(表1) 参議を経ずに権中納言直任の例

番号	氏 名	権中納言昇進前の官位	権中納言昇進年月日	年齢	備 考
1	藤原兼家 (右大臣師輔三男)	藏人頭従三位左中將	安和 2 年 (969) 2 月 7 日	41	参議を経ず安和元年 (968) 兄兼通を超越して従三位、同二年中納言、兼春宮大夫、同年 9 月 21 日正三位 (御即位前坊賞=権亮)
2	藤原道隆 (摂政兼家一男)	従三位右中將	寛和 2 年 (986) 7 月 5 日	34	花山天皇の一条天皇への譲位以降、兼家の権力掌握に伴い、7 月 5 日権中納言、同月 9 日正三位 (皇后宮御産後入内賞)、同 20 日 5 人を超越して権大納言、同月 27 日正二位
3	藤原道長 (摂政兼家五男)	従三位左京大夫	永延 2 年 (988) 正月 29 日	23	11 名を超えて参議を経ず任権中納言
4	藤原隆家 (関白道隆四男)	従三位左中將	長徳元年 (995) 4 月 6 日	17	
5	藤原頼通 (左大臣道長一男)	従二位春宮権大夫	寛弘 6 年 (1009) 3 月 4 日	18	
6	藤原教通 (左大臣道長三男)	正三位左中將中宮権大夫	長和 2 年 (1013) 6 月 23 日	18	兼左衛門督。同年 9 月 16 日従二位 (行幸中宮次賞)
7	藤原頼宗 (左大臣道長二男)	従二位右中將	長和 3 年 (1014) 3 月 28 日	22	
8	藤原能信 (太政大臣道長五男)	従三位左中將	寛仁元年 (1017) 8 月 30 日	23	
9	藤原長家 (前太政大臣道長六男)	正三位右中將	治安 3 年 (1023) 2 月 16 日	19	
10	源師房 (村上天皇孫、具平親王一男、関白左大臣頼通養子)	従三位右中將	万寿 3 年 (1026) 10 月 6 日	17	
11	藤原信家 (内大臣教通一男)	従二位右中將	長元 9 年 (1036) 12 月 8 日	19	
12	藤原通房 (関白左大臣頼通一男)	従二位権右中將	長暦 3 年 (1039) 正月 29 日	15	同年閏 12 月 26 日正二位
13	藤原師実 (関白左大臣頼通三男)	正三位左中將	天喜 4 年 (1056) 10 月 29 日	15	

『公卿補任』より作成

降も続いた。⁽²⁶⁾

紫式部の没年は未詳であるが、『小右記』寛仁三年（一〇一九）正月五日条に、藤原実資が中宮彰子のもとに参上した折の「相逢女房」とあるのが紫式部であると考えられている。故に、少なくとも寛仁三年までは生存していたといえよう。そうだとすると、紫式部が知り得るのは、能信より以前の八例と考えられる。いな、『紫式部日記』寛弘五年（一〇〇八）十一月一日条の記述により、『源氏物語』がすでにある程度書かれていたと思われるこの時期までであったとしても、少なくとも隆家以前の事例は知っていたはずである。

つまり紫式部の時代には、摂政・関白の子弟が非参議から権中納言に直任されることは慣例化しつつあったといえよう。彼女が同時代の出来事や慣習、事例を描き込んでいることを勘案すると、光源氏、夕霧、薫などいずれの作中人物にも、この昇進コースを歩ませなかったのには、何らかの意図があると考えた方が良好であろう。

さて、如上とは別の視点からではあるが、光源氏の「不経中納言」という問題が神野志隆光氏によって論ぜられている。氏は「不経中納言という光源氏の官歴は、反・〈風俗〉的である」、「虚構として、『風俗』を超越した存在であることによって、光源氏は物語の主人公たりうる」と指

摘されている。この「反・〈風俗〉的」とは具体的に如何なるものなのか明言はされていないが、行論から解釈すれば、物語の主人公として特殊な存在であることをアピールする狙いがあつたと受け取られよう。また別稿では、「一条朝に確立しつつあつた摂関子弟の特殊な榮達路線とは異なるものとして、読者の感覚に働き、機能することを意識したのだと、作者の敷設した光源氏らの官位昇進はうけとるべきなのであろう」と結論づけられている点に注目したい。本稿では具体的にどのような意図が考えられるのかという点について、参議を経ずに権中納言に直任するという昇進があえてあえて描かれないという特徴に留意した上で、光源氏等の昇進状況を詳細に取り上げるとともに、『源氏物語』と『紫式部日記』から窺える式部の昇進秩序や当該貴族社会の世相に対するまなざしに検討を加え、如何なる意図があつたのか、考察を深めたいと思う。

第三章 光源氏の昇進

作中人物の官位や昇進状況を通覧すると、おおむね紫式部と同時代の昇進慣例にのっとつた記述であるか、時に宇多朝頃の準拠であるかのいずれかであり、取り立てて違和感のある記述はみられない。しかし、光源氏、夕霧、薫に関しては、例外的な記述があえてなされているようである。

(表2) 後一条朝までの近衛大将の本官事例

(※近衛大将兼任時に中・大納言であるものを除く)

番号	兼任年月日	氏名	大将	兼任時の位階と本官	備考
1	大同2年(807) 4月22日	藤原内膳	左大将	正三位・右大臣	
2	弘仁2年(811) 6月1日	巨勢野足	右大将	正四位下・参議	
3	弘仁3年(812) 12月5日	藤原冬嗣	左大将	従四位上・参議	
4	弘仁7年(816) 12月1日	文室綿磨	右大将	従三位・参議	
5	天長7年(830) 8月4日	藤原吉野	右大将	従四位下・参議	
6	天長10年(833) 3月24日	橘氏公	右大将	従三位	非参議の初例、6月8日 任参議(『続日本後紀』)
7	貞観8年(866) 12月16日	藤原常行	右大将	正四位下・参議	
8	延喜6年(906) 8月25日	源光	右大将	従二位・右大臣	
9	永祚元年(989) 7月13日	藤原道隆	左大将	正二位・内大臣	

『近衛府補任』より作成

まずは源氏の昇進を取り上げよう。

(一) 参議兼大将

源氏は一二歳で元服し、一七歳で中将となり、一八歳の一〇月に三位に叙せられ、翌年に参議に補されている。その後、葵巻では大将とみえ、参議兼近衛大将であったことがわかる。この事例が珍しいことは、すでに黒板氏をはじめいくつかの研究で指摘されているものの、詳細な検討はなされていないため、今少し分析しておきたい。

そもそも近衛府とは、宝龜三年(七七二)、外衛府が廃止され、平城天皇の大同二年(八〇七)に近衛府を左近衛府、中衛府を右近衛府に改編して六衛府制となり、左右近衛府が成立したことに始まる。近衛府の長官である大将の相当位は、従三位と極めて高く、参議以上の兼任がみられるが、平安中期では中・大納言時に兼任され、大臣に昇進しても兼任している例が多い^⑩。

源氏のように参議で兼任する例は、弘仁から貞観年間までの五例(表二参照)を数えるのみである。貞観年間以前に遡るといことは、第二章で指摘した通り、「平安時代的な昇進制度」が完成する以前の例を引いたということになる。こうした特徴は次の点にもいえるのである。

(二) 参議から権大納言、大臣への昇進―権中納言の超越―

桐壺帝崩後、朱雀帝とその外戚右大臣一派が権力を掌握し、源氏と藤壺に対する圧力は強まる一方であった。やがて、弘徽殿太后らの策略に屈した二六歳の源氏は、「世の中いとわづらはしくはしたなきことのみまされば、せめて知らず顔にあり経ても、これよりまさることもやと」(須磨)の思いから、須磨への退去を決意する。その後、体調のすぐれぬ朱雀帝は、右大臣の娘・承香殿女御との間に誕生した皇子が二歳となった頃、春宮(のちの冷泉帝)への讓位を決意するようになった。そして、「朝廷の御後見をし、世をまつりごつべき人を思しめぐらすに、この源氏のかく沈みたまふこといとあたらしうあるまじきことなれば、つひに後の御諫めをも背きて、赦されたまふべき定め出で来ぬ」(明石)とみえるように、ついに源氏の赦免へ決心を固めた。大后の物の怪の苦しみや帝の目の悩みも増す一方であったため、七月二〇日過ぎに、赦免の宣旨を下されたのである。

帰京した源氏は、「ほどもなく、もとの御位あらたまりて、数より外の権大納言になりたまふ」とあり、一旦もとの官位である参議右大將に復したのち、さらに改めて権大納言に昇進したのであった。

現実の社会では、政争に敗れ左遷された者が赦免される

場合、左遷前の官位に復するのが通常の処置であるが、この時彼は異例の復帰を果たし、中納言も超越して一挙に権大納言に拔擢され、翌年二月には一歳になった春宮が元服、即位したのを機に、内大臣にまで昇るのである。

参議から中納言を超えて大納言へ補任された例を史実に求めると、極めて異例であることが分かる。『公卿補任』によると、かような例は、奈良時代末まで遡る。最も新しい例では、藤原北家の祖、房前の五男魚名が、神護景雲二年(七六八)二月、参議となり、宝龜元年(七七〇)一月、正三位、翌年三月に大納言に昇進したとみえる。ただし『公卿補任』宝龜二年の「藤魚名」の項には、「三月一三日任。不_レ経_二中納言_一。元三木左京大夫兼中務卿。公卿傳云、是日任_二中納言_一。九月任_二大納言_一」との注記が見えるため、実際は一度中納言に補任されたのち、大納言に昇進した可能性もある。その後、同九年に内臣に任じられ、忠臣・内大臣を経て天応元年(七八一)正月、正二位、同年六月左大臣兼大宰帥となるも、延暦元年(七八二)六月、氷上川継の事件に連座して左大臣を免ぜられている。

これ以前では二例確認できる。一つは橘諸兄の例である。彼は天平三年(七三一)参議に任ぜられ、翌四年従三位となり、政権を掌握していた藤原四卿が相ついで没した同九年の九月一三日に中納言を経ずに一挙に大納言へ任じられ、

翌年正月右大臣、同一五年に左大臣へ昇っている。⁽³¹⁾次例は諸兄と対立した藤原仲麻呂である。彼は同一五年参議従四位上となり、光明皇后の信任を得て、天平勝宝元年（七四九）七月二日、一氣に大納言となり中衛大將を兼ね、さらに紫微中台を設置してその長官紫微令に任じられた。⁽³²⁾いずれもかなり特殊な状況下で行われた特例的な人事であり、この三例以後こうした昇進は見えない。

紫式部がこれらの事例を知っていたかは未詳だが、「日本紀」を熟読した彼女が承知の上で設定したとも考えられよう。また、『源氏物語』の読者たる撰関期の貴族の感覚からすると、異例の人事という印象をもって受け止められたであろうと推察する。

以上のように、式部は「平安時代的な昇進制度」出現以前の例を用いることによって、ある意味異質の世界を描き、光源氏の昇進過程の特異性を描き分けたと考えられよう。

（三）准太上天皇

前述の通り、源氏二九歳の二月、藤壺との密通によって誕生した春宮は元服した。そして同月二〇日過ぎ、一一歳にして冷泉帝として即位したのであった。これに伴い、源氏は大納言から内大臣に昇る。その理由は、「数定まりてくつろぐ所もなかりければ、加はりたまふなりけり」（漚

標）と語られ、さらに「やがて世の政をしたまふべきなれど、さやうの事しげき職にはたへずなむとて、致仕の大臣、摂政したまふべきよし譲りきこえたまふ」（漚標）とある通り、本来は新帝の関白（摂政）たるべき存在であるものの、かつて病で辞任していた舅で致仕の左大臣にその座を譲り、致仕の左大臣は太政大臣に就任し、出仕を再開した。薄雲卷では、藤壺の死去に人知れず深く悲嘆する源氏をさらに苦悩が襲った。冷泉帝が出生の秘密を知ったのである。帝は源氏への譲位の意向を示すが受け入れられず、太政大臣就任の要請も拒絶され、一位への加階と牛車の宣旨のみを賜わった。それでもなお心残りゆえ親王になることを要請したが、源氏は「世の中の御後見したまふべき人なし」（薄雲）といい、天皇の後見の立場としては、現職の大臣であることが重要だとして、その意思がないことを示している。

やがて三三歳になった源氏は、六条御息所の娘を冷泉帝の後宮に入れ、他の妃に先んじて立后させると、太政大臣となった。四十賀を目前にして、明石の君との間に生まれ、紫の上が養女とした源氏唯一の姫君を春宮へ入内させた年、冷泉帝から「太上天皇になずらふ御位」を賜り、「御封加はり、年官、年爵などみな添ひたまふ（中略）院司どもなどなり」（藤裏葉）とみえ、格段に重々しく威厳を加えら

れたのである。

この措置は、非公式ながら帝の父であり、次期天皇の皇
後の父、ひいては次代の天皇の外祖父という三代にわたる
天皇の後見という立場が確定したことを明示したのだと理
解する。そして、元木氏が指摘されるように、「もはや臣
下を超越し、父院と同様の立場となったとみなしてよいの
ではないだろうか。すなわち、光源氏は冷泉の『後見』と
して王権を支える臣下ではなく、もはや王権の一環を構成
する存在となった³³⁾」といえよう。

源氏の准太上天皇就任について、山中氏は、現実的に臣
下、すなわち源氏や藤原氏が准太上天皇になるということ
はなく、明らかに虚構であるとしながらも、寛仁元年に准
太上天皇となった小一条院（敦明親王）の例に準拠してい
るのではないかと述べられている。

確かに「太上天皇にならずらふ御位」が実例としてみられ
るのは、三条天皇第一皇子敦明が父天皇の遺命により立太
子したものの、道長の圧力で寛仁元年（一〇一七）八月九
日、東宮を辞したのち、同月二五日、小一条院の号を授け
られ、准太上天皇となったのが唯一である。この例に準拠
したのであれば、藤裏葉巻はこれ以降に執筆されたことにな
るが、式部の没年の推定からしても可能性は低いと思わ
れる。

しかも、如上の敦明の立場と、父院として王権を構成す
る源氏の立場とは大きく異なっている。この点からも、敦
明の例を参考にしたとは考え難い。

むしろはじめて女院号が与えられた藤原詮子の例に擬え
て、式部が創作したものともみられる。詮子は、寛和二年
（九八六）六月、息子一条天皇が踐祚すると翌七月五日皇
太后となったが、正暦二年（九九一）九月一六日出家、皇
太后宮職を止め、太上天皇に準じて東三条院の院号が授け
られ、長徳二年（九九六）三月、病により院号及び年官年
爵を辞している。女院号が成立した要因については、様々
な考察が必要であるが、本稿では以下のように考えておき
たい。

三宮（皇后宮・皇太后宮・太皇太后宮）は令に定められ
た身位で、基本的に定員は各一名であった。女院はそうし
た規定のないより自由な立場で、上皇と同等の待遇を得ら
れる身位である。しかも詮子は、天元三年（九八〇）六月、
懷仁親王（一条天皇）を生んだものの、先に女御となつて
いた関白藤原頼忠女遵子が同五年三月皇后となり、円融天
皇と詮子・兼家との間に軋轢が生じたという経歴³⁴⁾を有して
いたことから、三宮以上の待遇によって権威付けが図られ
たと考えられよう。また、女院宣下の時期に着目すれば、
正暦二年二月に円融上皇が亡なったのを受けて宣下³⁵⁾されて

いることが了解される。故に、天皇家の家長としての立場を明示する意義があったと考えておきたい。

さて、男性貴族の場合、出家すると官位を辞するため、源氏も太政大臣のままで、いづれ辞任の可能性を有することになる。⁽³⁶⁾一方、太上天皇という身位とその待遇は、出家しても例えば円融院のように保持し得る。臣籍降下した源氏は即位もしておらず、勿論太上天皇にはなれないが、三代にわたる天皇のミウチであり、実質的には父院としての隔絶した立場を源氏に帯びさせるための確固とした装置が、准太上天皇なる地位だったのであろう。すなわち藤壺亡きあと、冷泉帝を後見する天皇家の家長として、王権を構成する源氏の立場を示すものであり、この点がまさに東三条院の場合と重なっている点を指摘したい。

第四章 夕霧と薫の昇進

(一) 夕霧の元服と昇進過程

一一歳で元服、即位した冷泉帝のもとで、源氏は内大臣となり、葵の上との間に誕生した八歳の夕霧は、内裏と東宮の童殿上を果たした。

一二歳の夏に源氏の計らいで夕霧の祖母・大宮が住む三条邸で元服しているが、その儀についてはなぜかほとんど叙述されず、源氏が「四位になしてんと思し、世人もさぞ

あらんと思へるを」「思しとどめ」たため、「浅葱にて殿上に還りたまふ」(少女)とみえる。こうした措置は周知のとおり、源氏が夕霧を大学寮に入れて学問をさせようという心づもりであったことによるが、源氏の長男という立場からは、現実的にはあり得ない処遇だといえる。

父祖の地位と天皇や摂関などの有力貴族との人的関係で昇進が左右される傾向が強まるなか、官人養成機関たる大学寮で学ぶ貴族子弟が著しく減少しゆく状況を目の当たりにして、文人貴族の家庭で育った紫式部の、学問を重視すべきとの強い主張が表される場面である。

ここで童殿上とその元服について確認しておきたい。童殿上とは元服前の童が天皇から特別に内裏清涼殿の殿上間への昇殿が許可されることを指し、宇多朝に成立したと考えられている。成人の殿上人と同様に、まず参内して天皇と対面し、人格的臣従関係の確認儀礼となる名簿奉呈を行い、殿上間に日給簡が付された。彼らは祖父が四位以上だった蔭孫か、父が四位以上の子息であり、公卿予備軍という位置づけの殿上人の子弟であった。童舞を奏したりして様々な儀式に参列する役割を担うなど、天皇と極めて親しい人格的関係を有する彼らは、天皇の御前である清涼殿孫廂等で元服の儀式を挙げることが許されていたのである。元服の儀では、天皇から御冠が下賜され、その冠と成人の

衣装を着し、庭中にて拝舞し、禄を賜わることになった。私邸で元服を行う際にも、天皇から御冠が下賜され、成人の服を身に纏って参内し天皇と対面して慶賀を申し、青色御衣の禄を賜っている³⁷。

また彼らの多くは、例えば院宮の御給（年爵）を得て、元服と同時に叙爵することが一般的となっていた³⁸。青色御衣とは天皇・上皇・東宮・親王以下、五位以上の貴族が着用する袍を指すが（六位藏人の極臈は特別に着用が許された）、少女巻で夕霧は、叙爵もされなかったために、浅葱すなわち六位の官人が着用する袍を着して宮中に還ったと記されている。昇殿は、代替わりや当人の官位の昇進ごとに改めて天皇の許可が必要であり、元服後も同様に許可を要するが、そのあたりの記述も全て略されている。

童殿上経験者でありながら、極めて珍しい六位からの出発を強調するために、他の描写は大幅に省略し、源氏の厳しく断固とした教育方針を際立たせる効果を狙ったのである。

夕霧はこのような処遇を辛く思っていたものの、勉学に励み、大学寮の寮試に及第して擬文章生となり、翌年には合格者わずか三人だった式部省の省試も合格して進士すなわち文章生となり、同年秋には五位に昇叙、侍従に補任されている。

多くの研究で指摘されている通り、源氏のような上流貴族の子弟が大学寮に入ること自体、極めて珍しいことではあるが、皆無ではなかった。むしろ不自然なのは夕霧の昇進過程である。実在した源扶義の経歴を取り上げて検討しよう。

扶義は宇多源氏源雅信の四男として天曆五年（九五）に誕生した。母は大納言藤原元方女である。父雅信は宇多天皇第八皇子敦実親王の三男であり、母は左大臣藤原時平の女であった。源姓を賜わり臣籍に下り、承平六年（九三六）従四位下に叙されて以降、侍従、右近衛権中将、天曆二年藏人頭、同五年参議となり、従一位左大臣まで昇っている。この間に、左衛門督・按察使、三代の東宮（師貞・懷仁・居貞親王）傳等を兼帯し、名臣の聞え高く、管絃・郭曲にも堪能な人物だったという³⁹。

その息扶義は、当時の慣例からすると父や兄時中と同様に公達子弟の昇進コース（「侍従―近衛少・中将―参議」へ）を辿ってしかるべきだが、彼は「教学為先」さんがため大学寮に入れられたようであり、彼の官途は天延三年（九七五）一二月に文章生となったところから始まっている。その後、貞元二年（九七七）六位藏人に補され、図書助、式部少丞を兼任、天元三年（九八〇）三〇歳にして従五位下に叙し、藏人を去り、以後国司を兼任し、右少弁・

左少弁・左中弁などを経て、正暦二年（九九二）蔵人頭、同三年正四位下、五年八月参議となり、右大弁を経て、長徳二年（九九六）左大弁に任じ、同四年七月二五日に四八歳で亡くなっている^{④①}。有能な実務官僚であり、一条天皇朝における九卿の一人と評された人物であった^{④②}。

このように、文章生が直接蔵人に補された者を進士蔵人と呼ぶが、扶義のように文章生になって弓場殿で行われる賦詩という採用試験によつて蔵人に補され、数カ月から数年で内官を兼任し、五年足らずで叙爵するという昇進は、一〇世紀頃からみられるようになったもので、天皇や摂関の意向が大きく反映された昇進だと指摘されている^{④③}。すなわち通常の文章生が内官を得るのに一〇年以上もの歳月を要する場合があったのに比べて、扶義は極めて有利であったことがわかる。

こうした特権的地位でもあった進士蔵人や秀才蔵人（文章得業生から蔵人に補された者）は、その後の昇進においても有利な場合が多く、公卿にまで昇進する場合があった。前述の通り、貴族社会の階層分化が進んだ結果、六位蔵人から公卿へ至る者は皆無に等しかったが、進士蔵人や秀才蔵人の場合は、扶義のように公卿にまで昇進する例が、例えば、醍醐朝の大江維時、村上朝の大江齊光、冷泉朝の平惟仲、円融朝の平親信と源扶義、一条朝の藤原広業^{④④}という

ように、若干ながら存在する。

以上のように、扶義の例は公達子弟が大学寮に入った希少の例であるとともに、当時の文章生のなかで最も有利な昇進コースを示していると理解される。ここで夕霧の場合と比較してみよう。

大きく異なるのは、童殿上である点と、その後の昇進過程との取り合わせである。

先述の通り、童殿上は公達子弟の中でも特に天皇との親近性を示す特権的な身分であり、そうした人物は少なくとも一〇世紀半ばまでには元服叙爵が定着しているので、浅葱の袍を着して大学寮に向かうという描写が如何に非現実的な設定かが明らかであろう。また、大学寮ではすぐに寮試に及第して擬文章生に、翌年には省試も合格して進士すなわち文章生となり、同年秋には五位に叙され侍従に補任されている。叙爵まで、入寮から足掛け二年という速さである。進士から叙爵まで足掛け六年という扶義の例でも、当時としては最も優遇された昇進であったことを考慮すると、その異例な速さが窺知されよう。

さらに不自然なのがその後の官途である。夕霧は、侍従から、翌年一四歳で左中將、一六歳で参議に補され宰相中將へ、一八歳の秋には中納言、一九歳の一二月に中納言右大将、二五歳で大納言左大将、その後右大臣を経て、左大

臣へ昇った。これは近衛次将コースを経る典型的な公達子弟の昇進コースである。

一方、扶義は前述の通り、叙爵して六位蔵人を去ったのち、右少弁・左少弁・左中弁などを経て、蔵人頭、正四位下、参議となり、右大弁を経て、左大弁に任じ四八歳で亡くなった。このように「蔵人―弁官、頭弁」を経て参議に昇進するのは、典型的な実務官僚の最も優遇された昇進コース（弁官コース）である。

文章生から出身したにもかかわらず、弁官コースではなく、近衛次将コースを経るという設定は、読者に大いなる違和感を与えたと推察する。そこに、あえてフィクション性と意外性を強調し、式部の主張を印象付ける効果を期待したのだと理解されよう。

（二）薫の元服と昇進過程

源氏（実際は柏木）と皇女女三宮との不義の子薫は、その誕生に関しては、源氏・女三宮と柏木の苦悶とともに詳述されるが、その後は五十日祝や六条院で明石の女御腹の三の宮（匂宮）らと楽しく遊ぶ様子など、成長の過程がたびたび描写されているものの、出仕の開始についてはわからない。すなわち、柏木の面影を次第に露わにしゆくなかで、夕霧など周囲からの疑惑のまなざしとそれをかわす

源氏微妙な心理状況とが詳述されるが、雲隠巻で六歳だった彼が次に登場する匂兵部卿巻では、一四歳の元服の記事から始まり、この間のことは全く記載されないためである。ただ、「二品の宮（女三宮）の若君は、院の聞こえつけたまへりしままに、冷泉院の帝とりわきて思しかしづ」（匂兵部卿）いたとみえ、故院すなわち源氏の遺言を守り、冷泉院が大切に育てていたことから、童殿上を果たしていたと推察されよう。元服も冷泉院の御所で行われ、一四歳の二月に侍従、同年秋に右近衛中将、院御給で四位に昇り、一九歳で三位の参議となり中将を兼ねた。二三歳で中納言、二六歳の二月に権大納言に補任され右大將を兼任したのち、間もなく物語が終わるため、彼の官途で知り得るのはここまでである。

如上から、薫は、夕霧より公卿昇進の年齢が若干遅いものの、典型的な公達子弟の昇進コースを辿っていることがわかる。建前上は、准太上天皇である源氏と皇女女三宮の息子であるのだから、臣下として最高の出自といえよう。故に夕霧の元服に際して源氏が「四位になしてん」（少女）と思ったと語ったように四位への直叙、そして第二章でも取り上げた通り、中將から権中納言への直任が行われても何ら不思議はない。にもかかわらず、あえて不自然なくらいに普通の公達子弟とさほど違わない昇進階梯を踏んでい

る。特別の昇進過程を描かないところに、作者の意図が感じられるのである。

それでは如上の描写に込められた作者の思惑を検討しよう。

第五章 昇進秩序に関する紫式部の主張

『源氏物語』少女巻では、前述した夕霧元服の際に、大學寮で学ばせようとする源氏の見解が叙述されている。従来から注目されてきた著名な一節ではあるが、引用しておきたい。

はかなき親に、かしこき子のまさる例は、いと難きことになむはべれば、まして次々伝はりつつ、隔たりゆかむほどの行く先、いとうしろめたきによりなむ、思ひたまへおきてはべる。高き家の子として、官爵心にかなひ、世の中さかりにおごりならひぬれば、学問などに身を苦しめむことは、いと遠くなむおぼゆべかめる。戯れ遊びを好みて、心のままなる官爵にのぼりぬれば、時に従ふ世人の、下には鼻まじろきをしつつ、追従し、気色とりつつ従ふほどは、おのづから人とおぼえてやむごとなきやうなれど、時移り、さるべき人に立ちおくれ、世おとろふる末には、人に軽め侮らるるに、かかりどころなきことになむはべる。なほ才

をもととしてこそ、大和魂の世に用ゐらるる方も強うはべらめ。さし当たりては心もとなきやうにはべれども、つひの世の重しとなるべき心おきてをならひなば、はべらざるなりなむ後も、うしろやすかるべきによりなむ。ただ今ははかばかしからずながらも、かくてはぐくみはべらば、せまりたる大学の衆とて、笑ひ侮る人もよもはべらじと思うたまふる。

ここに作者紫式部自身の学問に対する意識と、当時の貴族子弟の官途についての見解が明瞭に述べられていることが注目されてきた。

いま少し踏み込んで検討するならば、「高き家の子として、官爵心にかなひ、世の中さかりにおごりならひぬれば、(中略)人に軽め侮らるるに、かかりどころなきことになんはべる。」とは、一〇世紀末になつて急速に、格段に優位な昇進を遂げてきた兼家の子孫たちのことを念頭に置いているとみられる。さらに、「時移り、さるべき人に立ちおくれ、世おとろふる末には、人に軽め侮らるるに、かかりどころなきことになむはべる」の部分は、当時の読者たちにとっては、中関白道隆の息、伊周らを想起せずにはいられなかつたと思われる。

周知の通り、正暦元年(九九〇)父道隆が祖父兼家を継いで関白となると、伊周は頭中将となり、同二年参議から

従三位権中納言、翌年に正三位権大納言、同五年には叔父道長らを超えて若干二一歳で内大臣に進んだ。しかし、翌長徳元年（九九五）道隆が病床につくと後任の関白就任を熱望するも、勅許を得られず、道隆の病床に限り内覧に任ぜられた。

道隆が没したのちは、叔父道兼が関白に就任、僅か数日で没すると、東三条院藤原詮子の後押しにより道長に内覧の宣旨が下ったのである。以来、伊周と道長の対立は深まっていたが、長徳二年正月、弟隆家とともに花山院を襲撃、さらに東三条院を呪詛、また私に大元帥法を修したことなどの罪状から配流が決定し、大宰権帥に左遷された。ところが、病と称して播磨国での逗留を認められたが、京内への潜入が発覚し、結局大宰府に護送されたものの、大赦で罪を免ぜられ、長保三年（一〇〇一）本位に復し、正二位准大臣になったが、再び東三条院呪詛事件を起こし、失意のうちに生涯を閉じたのである。⁽⁴⁴⁾ このように伊周は、父の強引な後押しで急速な昇進を果たしたが、後ろ盾を失った瞬間に失脚し、転落の人生を歩んだ人物であった。しかし、これは伊周個人の問題ではなく、道長の子弟にも起こり得る可能性はあり、権力者子弟全般への警告としても読み取れよう。

ここで再び第二章の課題に戻ろう。当時、最上級エリー

トの昇進コースである、参議を超えて権中納言へ直任される例は、宇治十帖においてさえ記されず、『源氏物語』には全く登場しなかった。権中納言への直任は、兼家から始まる摂関子息の官位の急激な上昇と、摂関の嫡系継承の傾向を顕すものであった。⁽⁴⁵⁾ つまり、彼らは九・一〇世紀に形成された昇進慣例を破り、彼らに都合のよい特殊な昇進慣例を作り出し、それを「先例」として定着させていったのであった。⁽⁴⁶⁾ その代表的なもののひとつが権中納言への直任である。あまりに現実には即した具体的な描写になると、道長自身への直截的な批判と捉えられる可能性があったため、あえてそのような描写を控えたと考えられる。当時最高の権力者であり、式部の主人彰子の父親、かつ『源氏物語』創作におけるパトロンでもある道長を、直接批判することは、立場上憚られたであろう。

実際、今井氏や山中氏が、源氏や頭中将が左大臣にならなかった点について、「左大臣の呼称がそのまま左大臣道長を指すものであったことを憚った作者の所為」だと指摘しているように、光源氏Ⅱ道長というイメージを読者に持たれることを避ける必要があったであろう。しかし、物語の設定上の配慮や道長への遠慮だけが理由であろうか。

紫式部自身の思想や政治的立場を考える際、彼女が残した作品以外からの情報は、あまりにも少ない。極めて少な

い史実としての情報において以下の三点は重要であろう。式部が中宮彰子に白居易の新樂府を進講した点、彰子が時として父道長に反する意見をも主張する国母となった事実、かかる彰子を「賢后」称した藤原実資と彰子との取次役の女房が紫式部であったことである。⁴⁷新樂府とは社会批判や風刺の意図をもった内容として知られており、そうした内容や物事を捉える視角を国母となる彰子に伝えたいという意志を式部が有していたことが窺える。

兼家以降の摂関の子息らは従来の慣例を次々に打ち破る異例の昇進を重ね、それがやがて慣例化していくのが紫式部の生きた一〇世紀末から一一世紀にかけての時期であった。それは、九・一〇世紀につくられた平安貴族社会の秩序を解体し、中世―院政―的な社会への変容をもたらすものであったと考えられるが、そうした大きな変化の兆しをいち早く察知し、文章に著したのが『源氏物語』だったといえよう。そのためには二つの画期―一つは律令制から平安貴族社会の秩序が形成、完成する宇多朝頃、もう一つはそれが急激に変化する兼家以降から現在（紫式部と同時代）―を通して長いスパンで歴史の流れを捉え、描写することが不可欠である。

時代の変遷を長いスパンで捉え、時に予言的な将来への憂いを記し、世相を批判することが、『源氏物語』を叙述

する大きな目的ではなかったかと思う。かような世相への痛烈な批判が物語の主題であったと考えられる。⁴⁸つまり、彼女は時代の矛盾や影をえぐり出し、作中人物に語らせ、また地の文（草子地）に記すことで、明確に主張したのだと思われる。それはつまり六国史を超える、歴史叙述を目指したといえるのではないだろうか。

おわりに―物語と史書―

六国史とは、中国王朝の正史編纂に倣い、古代日本の政府が編纂した官撰史書の総称である。しかし、中国史書と異なり、六国史は編年体で天皇を軸にして、主に公事に関する内容を中心に、詔、勅、官符、省・諸国からの重要な報告と政府の対策、さらに五位以上の叙位・任官記事、外国使節の関連事項、その他、瑞祥、災害、天文に関する記録、重要人物の薨卒伝などが記されるという特色を有する。個々の編纂者や編纂時の権力によって、各々特色がみられるが、おおむね実録的な史書といえよう。つまりそこには世相批判や歴史の流れを大きくとらえ第三者の目から見た批判的叙述は求め難い。

今回検討事例に挙げた貴族社会の昇進秩序の変遷やそれに対する批評は、従来の史書の形態からは困難と思われる。そうした日本における伝統的な史書の叙述に飽き足らず、

史記などの中国の史書を参考にした歴史叙述を、仮名でつづる物語という形式で試みたのが『源氏物語』だったと考えられよう。

世相批判という視点から、『源氏物語』の王権や后位の描かれ方にも検討を加えるべきであるがすでに紙幅が尽きている。また、六国史と中国史書との歴史叙述の具体的な分析と『源氏物語』の叙述における影響についても考察する必要があるが、今その問題を論じる能力はないため、今後の課題としたい。

門外漢ゆえ読解の誤りや、極めて膨大な源氏研究の片鱗しか把握できておらず、すでに論じられた問題ではないかと危惧している。先学への非礼にご海容を乞うともに、忌憚のないご批判をいただければ幸いである。

注

- (1) 山中裕①「源氏物語の歴史認識」(『平安朝文学の史的研究』吉川弘文館、一九七四年)、同②「『源氏物語』の賜姓源氏と摂関制」(『源氏物語の史的研究』思文閣出版、一九九七年)。
- (2) 黒板伸夫①「摂関時代における「権官」の性格―納言と弁官の正・権を中心として」(『摂関時代史論集』吉川弘文館、一九八〇年、初出は一九七八年)、同②「『源氏物語』と官位制度」(『平安王朝の宮廷社会』吉川弘文館、一九九五年、初

出は一九七九年)。

- (3) 服藤早苗『「源氏物語」の時代を生きた女性たち』(NHK出版ブックス二〇〇〇年) ほか。
- (4) 瀧浪貞子「源氏物語とその時代」(瀧浪貞子編『歴史と古典 源氏物語を読む』吉川弘文館、二〇〇八年)。
- (5) 元木泰雄「源氏物語と王権」(瀧浪貞子編『歴史と古典 源氏物語を読む』吉川弘文館、二〇〇八年)。
- (6) 三橋正「古記録文化論」(武蔵野書院、二〇一五年)。
- (7) 清水好子「源氏物語論」(塙選書、一九六六年) ほか。
- (8) 今井源衛「一条朝と源氏物語」(『今井源衛著作集 第一巻』笠間書院、二〇〇三年、初出は一九七八年) 四三〇頁。
- (9) 山中氏注(1)②論文一四四頁。
- (10) 黒板氏注(2)②論文一八九頁。
- (11) 黒板氏注(2)②論文二〇九頁。
- (12) 例えば以下のような研究がある。池田亀鑑編『源氏物語事典』主要人物官位・身分・年齢一覧(東京堂出版、一九六〇年)。「神野志隆光①「光源氏官歴の一問題―納言をめぐる」(『古代文化』二八、一九七六年)。同②「登場人物の官位の昇進は当時の現実に対応するか」(『国文学 解釈と教材の研究 源氏物語の謎へ特集』二五一六、一九八〇年。池田和臣「源氏物語竹河卷官位攷―竹河論のための序章として」(『国語と国文学』五七、一九八〇年。菊地真「『源氏物語』「少女卷」における夕霧の初任叙位」(『国文学研究』一二〇、一九九六年。星山健「『源氏物語』「真木柱」巻における式部卿官像と為平親王―子息達の官位に着目して」(『国語国文』七六一、二〇〇七年)。宮田光「竹河卷の昇進の記事をめぐる」(『東海学園言語・文学・文化』一一、二〇一一

年)。藤本勝義「光源氏の官職―栄進の独自性と歴史認識」(『源氏物語の表現と史実』笠間書院、二〇一二年、初出は二〇〇五年)。

- (13) 野村忠夫『古代官僚の世界―その構造と勤務評定・昇進』(塙書房、一九六九年)。

- (14) 古瀬奈津子「官人出身法からみた日唐官僚制の特質」(池田温編『日中律令制の諸相』東方書店、二〇〇二年)。

- (15) 吉川真司「律令官人制の再編」(『律令官僚制の研究』塙書房、一九九八年、初出は一九八九年)。

- (16) 玉井力「一〇・一一世紀の日本―摂関政治」(『平安時代の貴族と天皇』岩波書店、二〇〇〇年、初出は一九九五年、佐古愛己「平安貴族社会における叙位制度の展開と特質」(『平安貴族社会の秩序と昇進』思文閣出版、二〇一二年)。

- (17) 笹山晴生『日本古代衛府制度の研究』(東京大学出版会、一九八五年)、玉井氏注(16)。

- (18) 拙著注(16)。

- (19) 古瀬奈津子「日本古代王権と儀式」(吉川弘文館、一九九八年)。

- (20) 永井晋「一二世紀中・後期の御給と貴族・官人」(『国学院大学大学院紀要・文学研究科』一七、一九八六年)。尾上陽介①「年爵制度の変遷とその本質」(『東京大学史料編纂所研究紀要』四、一九九三年)、同②「鎌倉時代の年爵」(『明月記研究』二、一九九七年)、同③「年官制度の本質」(『史観』一四五、二〇〇一年)。拙著(16)。

- (21) 拙著注(16)。

- (22) 玉井氏注(16)。

- (23) 『朝野群載』卷一二「内記」。

- (24) 『令集解』卷第一「官位令第一」。

- (25) 拙著注(16)。

- (26) 百瀬今朝雄「中納言への道(一)―参議芳十五年」(『弘安書札礼の研究―中世公家社会における家格の桎梏』東京大学出版会、二〇〇〇年、初出は一九九一年)。

- (27) 神野志氏注(12)①論文四三頁。

- (28) 神野志氏注(12)②論文六一頁。

- (29) 『日本後紀』延暦一八年四月二七日条。延暦一八年四月二三日付太政官奏(『三代格』五所収)。

- (30) 笹山氏注(17)。市川久編『近衛府補任』(続群書類従完成会、一九九二年)。

- (31) 『公卿補任』橘諸兄の項。

- (32) 『公卿補任』藤原仲麻呂の項。

- (33) 元木氏注(5)七五頁。

- (34) 『小右記』天元五年二・三月条、『荣花物語』卷第二「花山たつぬる中納言」。

- (35) 『日本紀略』正暦二年九月一六日条、『女院小伝』「東三条院」の項。

- (36) 詮子は出家により皇太后を辞しているが、一条天皇皇后定子が皇后のまま皇女を出産し、そのまま后位にあり続けたように、女性の場合は出家しても官位を辞さない場合もある。

- (37) 服藤早苗「童殿上の成立と変容」(『平安王朝の子どもたち―王権と家・童』吉川弘文館、二〇〇四年、初出は一九九七年)。

- (38) 拙著注(16)。

- (39) 『公卿補任』源雅信の項。『一中歴』一三。

- (40) 『公卿補任』源扶義の項。

(41) 『統本朝往生伝』。

(42) 岸野幸子「文章科出身者の任官と昇進―蔵人との関係を中心」(『お茶の水史学』四二、一九九八年)。

(43) 『公卿補任』各人の項。

(44) 『公卿補任』藤原伊周の項。

(45) 元木泰雄「摂関政治の衰退」(『院政期政治史研究』思文閣出版、一九九六年、初出は一九九四年)。

(46) 拙著注(16)。

(47) 今井源衛『人物叢書 紫式部』(吉川弘文館、一九六六年)。古瀬奈津子「清少納言と紫式部―中宮の記録係」(元木泰雄編『古代の人物六 王朝の変容と武者』清文堂、二〇〇五年)。丸山裕美子『日本史リフレット人〇二〇 清少納言と紫式部―和漢混淆の時代の宮の女房』(吉川弘文館、二〇一五年)。

(48) この点に関して、藤本勝義氏は、「摂関家の世襲制などはむしろ批判されているとも考えられる。これは源氏物語に流れる歴史認識であるといつてよい」、「常に、恋や風流事のみやびやかな営みに憧れる光源氏の生き方が、権力掌握に汲々とする輩―右大臣一派や(中略)歴代の権力者たち―を相対化し、批判するのである。」と論ぜられている(藤本氏注(12)一四九頁)。本稿も基本的には藤本氏の主張を支持するものであるが、「世襲制」そのものを批判するというよりも(詳述した通り、世襲制的性格は官位制導入当初よりみえるものである)、九・一〇世紀以来の「平安時代的な昇進制度」に基づく慣例を無視して、兼家以降に摂関子弟が急激な官位上昇を果たし、貴族社会における身分格差が拡大、固定化する状況を、具体的な批判対象としていけると、筆者は考えてい

る。

(49) 例えば、片桐洋一「源氏物語に投影した海外文学―主として『史記』との関連における方法論的私見」(『国文学解釈と教材の研究』六一三、一九六一年)。田中隆昭①『源氏物語歴史と虚構』(勉誠社、一九九三年)、同②『源氏物語草子地の機能―『史記』論纂・唐代伝奇とのかかわりから』(『国文学研究』一一二、一九九四年)などがある。

謝辞

本稿は上野辰義先生よりご紹介を賜り、寄稿させていたいただいたものである。貴重な機会を与えていただき、心から謝意を表したい。